

## まえがき

本書は、慶應義塾大学日吉キャンパスに設置されている、主として1・2年生対象の「地域文化論Ⅰ（アメリカ研究入門）」という筆者が担当する授業の講義ノートをもとにした、アメリカ理解のための手引書である。高校までの課程を経れば、特別な予備知識がなくとも、アメリカとはどんな国なのかが十分わかるようになっている。

1993年のカリキュラム改革で新設されたこの「地域文化論」という授業は、特定の専門に偏ることなく、総合的に外国の文化・社会・歴史を学ぶための外国研究講座である。従来の大学の一般教育科目の多くが「文学」とか「美術」といった分野ごとの縦割りになっていたのに対し、この「地域文化論」は特定の国や地域の問題を領域横断的に取り上げる総合性を重視している。その一つである「地域文化論Ⅰ（アメリカ研究入門）」は、総合的なアメリカ研究のための基礎科目として、専攻分野にかかわらず、アメリカに関する問題を扱う際に必須の基礎知識や背景的知識を網羅した半期科目である。それゆえ、その授業内容を基にした本書も、アメリカの政治、経済、法律、芸術、文化、社会、宗教などの多方面の話題を扱いながら、アメリカという国を理解するための基礎固めができるようになっている。こうした授業方針に対しては、設置した初年度以来、学生諸君の関心が非常に高く、例年履修者は500名程度に達し、必修科目でもなく、また出席も取らないのに、毎回大教室が満員という盛況である。

アメリカという国を分野ごとに解説した入門書は、実はすでに何冊も出版されてきている。しかし、アメリカ研究の入門講義をする際、そのような本は実際はあまり使いやすいとはいえない。今週は経済、来週は法律といった具合では、毎回の授業の間に有機的なつながりが生まれにくく、総合的といいながら断片的な講義の積み重ねになりかねない。しかも、そうした類の教科書の多くは複数の著者の論を集めた形式になっており、アメリカという国を鮮明にとらえるための一貫した視点を学生に伝えるのがかえって難しい。また、そうした分野ごとにまとめられた教科書は、はっきりとアメリカ研究をしようと決めている学生には有益

かもしれないが、大学入学の時点では、まだ学生の関心は漠然としたものであることが多く、アメリカという国に興味はあっても、その中の何か個別の分野に特に強い関心を持っているとは限らないため、かえって学生には荷が重い場合もある。その上、分野ごとに毎回の授業を構成するとすると、セメスター制に合わせた半期科目であるこの授業では、現代アメリカを理解するために必要な歴史を教える時間を十分取ることが難しくなる面もある。

では、一人の著者によるアメリカの歴史を扱った本を使えば問題は解決するのかというと、必ずしもそうではない。確かに、そうした本の中には名著と思えるものもある。だが、いわゆるアメリカ史の本の場合、過去から現在まで同じような密度で記述されているのが普通である。だからこそ、歴史の本なのである。ところが、学生の関心は、必ずしも昔のアメリカにあるわけではなく、現代アメリカの様々な現象に対して向けられている場合がほとんどである。従って、学生の関心にこたえるためには、なるべく現代に近いところの密度を厚くするなど、多少めりはりをつける必要も出てくる。また、歴史の本の場合、必ずしも文化面の記述が充分でないこともある。授業を始める4月の段階では、学生の関心は必ずしもアメリカの過去そのものにあるわけではなく、むしろ、アメリカとはどんな特徴をもった国なのかを知りたいという点にある場合も多い。そうした問いには、いわゆる歴史の本を読んだだけでは答をみつけにくいことがしばしばである。その上、歴史の勉強というと、大学受験の際に年号や用語を丸暗記しなければならなかった苦い経験から、アレルギーを感じている学生も少なくない。歴史の流れを学ぶ面白さを知る前に、丸暗記こそが歴史の勉強だという不幸な思い違いをしている学生も少なくないのである。従って、アメリカという国を理解するための入門講座に、アメリカ史の本を使ったとしても、それは全てを解決してくれるわけではなく、かえって学生との間にミスマッチを起こす可能性すらある。

だが、現代アメリカが過去の歴史的経緯の積み重ねとして存在している以上、現代アメリカの諸現象について理解を深め、アメリカとはどんな国なのかの概略をつかもうとするなら、アメリカの歴史について学ぶことは避けて通れない。従って、純然たる歴史の講義にならずにいかに抵抗感なくアメリカの歴史の話に学生を引きずり込むかという工夫が必要となる。

このように、総合的なアメリカ研究の基礎科目を講義することは、意外に難し

い。様々な分野に触れながらも断片化を避け、毎回の講義が有機的につながるような軸をしっかりと設定しつつ、歴史の授業ではないふりをしながらしっかりと歴史を教え、過去のアメリカと現代アメリカとのつながりを理解させるようにしてはならないのである。本書は、こうしたこれまでの授業での経験を活かしながら、アメリカ研究の基礎科目の教え方の一つのモデルを示したつもりである。

本書の特徴を一言でいえば、一貫した視座を確保しながら、分野ごとの研究入門書的なスタイルと、アメリカ史の本という路線の両方を融合させ、分野ごとの最低限の基礎知識と歴史的な流れの理解の両方を同時に学べるようにしたことである。このことは、序論とそれに続く各章をお読みいただければ、おわかりいただけると思う。その際、各章の冒頭には、前の章とのつながりや、その章のテーマが簡潔に記されているので、是非参考にしていただきたい。また、章末には、各章で取り上げた話題が現代アメリカとどのようにつながってくるのかという点を理解できるような部分を設けてある。

もっとも、こうした形式を取ることによって犠牲にしなくてはならなかった点も多い。授業回数の関係から、毎回の授業で扱える量には限りがあり、分野ごとの勉強とアメリカ史の勉強の両方を一挙に消化するとなると、削らざるをえない部分も多いからである。実際、本書の内容は、分野ごとの研究入門書と比べれば、個別分野の記述は詳しくなく、歴史の本と比べると、昔に比べて現代とりわけ第二次世界大戦以降の記述を厚くしている点で、かなり密度にめりはりがあるといえるだろう。また、テーマごとのまとまりを重視する立場から、必ずしも完全な年代順に話題がプロットされているわけではないところもある。

だが、履修する学生諸君がみなアメリカ研究者になるわけではない。この授業が入門的内容である以上、アメリカについて語るのならこの程度は各分野について知っておいてほしいというミニマムの知識の水準を維持しつつ、将来卒論で特定のアメリカ研究を展開したいような人にも、社会人としてアメリカ・ウォッチャー的資質を備えておきたい人にも有効な内容をカバーできていれば、入門講義としての使命は十分果たしたことになるのではないかというのが筆者の考えである。従って、複雑な話をあえて単純化したり図式化している部分もあるが、それは入門講義としてのわかりやすさを追求してきたがゆえの結果である。

この授業を担当し始めてからすでに10年が過ぎた。その間、自分の講義ノートを本にしたいとは、実のところ当初はあまり思わなかった。しかし、授業評価をやっても毎年非常に好意的な反応がかえってくるにつけ、こうした内容は、自分が直接教えている学生諸君以外の方々にとってももしかしたら決して無駄ではないのかもしれないとも次第に考えるようになった。とりわけ、今まで表面的にしかみていなかったアメリカという国の持つ様々な側面に改めて気づいたという感想や、アメリカの歴史とはこんなに面白いのかと授業を通して初めて知ったといった声が繰り返し筆者の元に寄せられたことは、単行本化を決断する重要な判断材料になった。その点からすれば、実に多くの熱心な学生諸君が毎年自分の講義に参加してくれたことが、本書が世に出る最大の原因となったといつてよい。

実は、自分自身、このような内容の講義を受けた経験がない。アメリカ文学史やアメリカ史といった授業は自分の学生時代にもあったが、領域横断的にかつ歴史の流れまで手っ取り早く教えてくれるような便利な授業はなかった。実際、この授業の講義ノートを準備する段階では、手探り状態で、途方もない時間を要した。それだけに、この授業には愛着がある。本書でアメリカの全てがわかるわけでは毛頭ないが、アメリカについて関心をお持ちの方々にとって、アメリカとはこんな国だったのかという新たな発見に向けて少しでも本書がお役に立てば幸いである。

なお、本書では、従来の表記と若干異なり、英語の実際の発音に近い表記をしているものが一部ある。これは、従来の表記が実際の英語の発音とずれているため、そうしたずれを是正すべきではないかという筆者の考えによるものであるが、読み進める上での支障はほとんどないと思う。また、「先住インディアン」や「黒人」という表記も用いているが、こうした表記には問題があることを承知の上で、あえて煩雑さを避けるためにこのような表記を使用した。

最後に、筆者の怠慢にもかかわらず、辛抱強く編集をして下さった慶應義塾大学出版会の乗みどりさんに、厚く御礼申し上げたい。

2003年8月

鈴木 透

## 第2版の刊行によせて

初版から13年が経過した。この間、増刷の折に、その後のアメリカに関する記述を多少追加することを重ねてきたが、今回は21世紀の部分を新たな章として加筆し、終章も大幅に改訂した。

そもそも、自分が生きている時代について、それが歴史上のどのような位置に相当するのか分析するのは、とても厄介な作業である。自分を包んでいる世界の外に出られないのに、外側から覗いたら今の時代はどう映るのか考えねばならないからである。まして、同時多発テロ事件という未曾有の経験がアメリカに何をもたらすのかを2003年という初版のタイミングで考えるのは、至難の業であった。

思い起こせば、この事件によってアメリカは全く違う時代に突入したかのような論調が当時は少なくなかった。だが、同時多発テロ事件の前と後の時代の非連続性を強調する議論には、自分自身は抵抗があった。長い目で見ればむしろこの事件は、アメリカが向き合うのを避けてきた自国の矛盾や不完全さと改めてアメリカ国民が対峙せねばならない状況を作り出すことになるのではないかと、そして、アメリカは過去と決別して新しい時代に突入していくというよりは、逆に過去の呪縛と格闘せねばなくなるのではないかと、という予感が筆者にはあった。

その後のアメリカの軌跡は、こうした筆者の予感がある程度的中しているのではないかと確信を与えてくれた。一見すると、同時多発テロ事件によってアメリカという国が一変してしまったように思う方もおられるかもしれない。確かにそのような部分が全くないわけではないが、そこにばかり目を奪われると、現代アメリカの混沌とした状況の端緒が、実際にはそれ以前の時代にまで遡るものであることを見落としかねない。筆者としては、この事件の前後の時代の隠れた連続性というものを念頭に置きながら新しい章を書き進めたつもりであり、こうした視点が読者の方々の現代アメリカ理解に役立つことを願っている。

2016年11月

鈴木 透



# 目 次

まえがき	i
第2版の刊行によせて	v
地図 アメリカ合衆国の領土拡大と各州の連邦加入年	vi
第1章 序論——現代アメリカの見取り図	1
この章のねらい	1
1 アメリカという国への素朴な疑問	3
2 実験国家としてのアメリカ	4
3 アメリカのエネルギー源としての相反する二つのベクトル	6
4 総合的なアメリカ理解に向けて	7
5 アメリカ研究への招待	9
6 未完成の国アメリカ	12
第2章 アメリカという「物語」——ピューリタニズムのレトリック	13
この章のねらい	13
1 ピューリタン植民の歴史的経緯	15
(1) ヨーロッパ諸国による北アメリカ大陸の植民地化	
(2) イギリスからアメリカへの植民の本格化	
(3) ピューリタンの初期の移住の二つの流れ	
2 ピューリタンの思想的特質	19
(1) 回心に基づく選民意識	
(2) 新たな契約と使命	
(3) 予型論的発想と解釈コードとしての楽園建設物語	
3 植民地社会の発展とピューリタンの世界観	21
(1) 対外的な問題	
(2) 内政上の問題	
4 文化としてのアメリカン・ジェレマイアッド	23
(1) ジェレマイアッドの起源	
(2) アメリカン・ジェレマイアッドの特質	
5 ピューリタンと現代アメリカ	26
第3章 独立宣言と合衆国憲法——その理念と問題点	29
この章のねらい	29
1 独立革命前夜のアメリカ	31
(1) 植民地社会の成熟	
(2) イギリスによる統制の緩み	
2 独立革命の経緯	33
(1) フレンチ・インディアン戦争の終結とイギリスによる統制の強化	
(2) 独立戦争の始まりと独立既成事実化の動き	

3	独立宣言の理念と問題点	36
	(1) 独立宣言の論理構成	
	(2) 独立宣言の問題点——独立後の国家体制と非白人の人権	
4	独立戦争の終結とアメリカ合衆国の承認	40
	(1) 独立戦争の転機	
	(2) 連合規約の制定と国民意識の広まり	
5	合衆国憲法の理念と問題点	42
	(1) 合衆国憲法の構成と基本理念	
	(2) 合衆国憲法の問題点	
6	独立革命と現代アメリカ	44
第4章	「アメリカのアダム」——文学にみるアメリカの文化的独立	47
	この章のねらい	47
1	新しい国家、新しい人間像——アメリカン・ルネサンスの背景	49
	(1) ピューリタニズムと啓蒙思想の橋渡し——ベンジャミン・フランクリンの遺産	
	(2) 啓蒙思想からロマン主義へ——「良き市民」から「アメリカらしい人間像」へ	
	(3) 独自の文学的題材を求めて——アメリカン・ルネサンスの自然観	
2	空間のヒーロー——超越主義的「楽園のアダム」	53
	(1) エマソンの超越主義	
	(2) ホイットマンとアメリカのアダム	
	(3) 超越主義の実践と後退	
3	空間と時間(歴史)との摩擦——アメリカ型イニシエーションの物語	56
	(1) クーパーと失われゆく楽園	
	(2) 行き場を失うアダムたち	
	(3) 繰り返し描かれるアダムの悲劇	
4	アメリカン・ルネサンスと現代アメリカ	59
第5章	「連邦」対「州権」——奴隷制度と南北戦争	61
	この章のねらい	61
1	奴隷制度と南部社会	63
	(1) アメリカ南部への黒人奴隷流入の経緯	
	(2) 奴隷制南部社会の特質	
2	準州昇格問題と奴隷解放論	67
	(1) 南北の妥協と協定の形骸化	
	(2) 奴隷解放論とドレッド・スコット判決	
3	リンカンの大統領就任と南北戦争	72
	(1) リンカンの立場と戦略	
	(2) 南北戦争の長期化と奴隷解放宣言	
4	南部再建と人種隔離政策——黒人を抑圧する制度の復活	75
	(1) 南部の連邦への復帰と南部再建	
	(2) 復活する黒人差別	
5	南北戦争と現代アメリカ	77

第6章 「開拓」か「侵略」か——フロンティアの神話と現実	79
この章のねらい	79
1 合衆国の領土の拡大	81
(1) ルイジアナ買収と北西部方面への領土の拡大	
(2) 南・南西部方面への拡大	
(3) フロンティアの定義	
2 西漸運動を支えたエネルギー	84
(1) 経済的要因	
(2) 精神的要因	
3 ターナーのフロンティア学説——白人側からみたフロンティアの持つ意味	87
4 「開拓」の犠牲者たち	88
(1) 白人の侵入と先住インディアンの抵抗	
(2) 同化政策と強制移住	
(3) 先住インディアンの抵抗の沈静化と文化破壊	
5 フロンティアと現代アメリカ	94
第7章 競争原理と公共の利益——アメリカン・ドリームの光と影	97
この章のねらい	97
1 農本社会から産業社会へ	99
(1) ハミルトンの工業化路線とジェファソンの農本主義	
(2) 北部における工業化の発展とその要因	
2 巨大企業の形成過程とその問題点	101
(1) 巨大企業のパイオニアたち——カーネギーとロックフェラー	
(2) 社会進化論——適者生存の原理の拡大解釈	
(3) 巨大企業による価格の維持と独占	
3 自由競争から公正さの確保へ——自由放任主義の規制と改革	105
(1) 上からの改革	
(2) 下からの改革	
4 「金ぴか時代」と現代アメリカ	109
第8章 正統と異端——ファンダメンタリズムと100%アメリカニズム	111
この章のねらい	111
1 繁栄と喪失——1920年代の社会風俗	113
(1) 繁栄の時代の到来とその要因	
(2) 伝統的価値観からの解放とその行方	
2 保守的価値観への傾斜	116
(1) 禁酒法の制定	
(2) モンキー裁判（スコープス裁判）とファンダメンタリズム	
3 非WASPへの排撃——100%アメリカニズムの人種的・宗教的不寛容	118
(1) KKK（クー・クラックス・クラン）の台頭	
(2) サッコ＝ヴァンゼッティ事件	
(3) 移民法の制定	
4 1920年代と現代アメリカ	123

第9章 恐慌から冷戦へ——第二次世界大戦と合衆国	125
この章のねらい	125
1 アメリカ外交の展開	127
(1) 孤立主義の二面性	
(2) 第一次世界大戦と国際連盟構想	
2 国内再建から世界秩序の再建へ	130
(1) 大恐慌の後遺症とニューディール政策	
(2) 第二次世界大戦への参戦と孤立主義の終焉	
3 アメリカの軍事大国化と思想的不寛容	133
(1) 共産主義拡大への警戒感と軍拡競争	
(2) アメリカ国内における思想的引き締め	
(3) 順応主義(コンフォーミズム)の蔓延——1950年代のアメリカ	
4 1950年代と現代アメリカ	136
第10章 分裂する超大国——1960年代の精神風土とベトナム戦争	139
この章のねらい	139
1 変革を求めて——1960年代の始動	141
(1) ケネディー政権の発足	
(2) 学生運動の広まり	
(3) 対抗文化(カウンター・カルチャー)の登場	
2 「内なる闘い」としてのベトナム戦争	145
(1) ベトナム戦争の発端	
(2) 反戦運動の波紋	
(3) ベトナム戦争の終結	
3 アメリカの陰り——ベトナム戦争の後遺症と1970年代	148
(1) 揺らぎ始めた超大国の政治・経済的基盤	
(2) 自信喪失と虚無感	
4 1960年代と現代アメリカ	151
第11章 世界一豊かな国の「他者」——公民権運動と女性解放運動	153
この章のねらい	153
1 黒人運動の歴史的展開	155
(1) 南北戦争の終結と黒人解放運動の始動	
(2) NAACPの法廷闘争	
(3) 二つの世界大戦と黒人問題の前進	
2 公民権運動の軌跡	158
(1) 公民権運動の盛り上がりと南部保守勢力の抵抗	
(2) 前進する公民権運動	
(3) 公民権運動の衰退と黒人運動の分裂	
3 女性解放運動のインパクト	164
(1) アメリカにおける女性解放運動の展開	
(2) ベティー・フリーダんとNOWの設立	
(3) 女性解放運動の成果	

4	公民権運動・女性解放運動と現代アメリカ	167
第12章	過去との対話——建築からみたアメリカ	171
	この章のねらい	171
1	アメリカ建築の変遷	173
	(1) 植民地時代の様式	
	(2) 独立革命期から19世紀前半の様式	
	(3) ヴィクトリア様式	
	(4) コロニアル・リヴァイヴァル	
	(5) 国際様式	
	(6) ポストモダニズム	
2	ポストモダニズム建築への視角	179
	(1) 消費社会の特質とポストモダニズム建築	
	(2) 都市の再生とポストモダニズム建築	
3	アメリカ建築とアメリカのプラグマティズム	181
第13章	ベトナム後遺症を超えて——1980年代のアメリカ再生への処方箋	183
	この章のねらい	183
1	レーガン政権のアメリカ再生へのシナリオ	185
	(1) 対ソ強硬路線の復活とイラン・コントラ事件	
	(2) レーガノミクスと双子の赤字	
	(3) 保守派によるリベラリズム批判	
2	アメリカ衰退論の標的とアメリカの分裂への危機感	191
	(1) 教育問題——文化相対主義批判	
	(2) 家族問題——個人主義批判	
3	80年代アメリカの歴史的位置	195
第14章	統合化と多元化の行方——1990年代におけるアメリカの細分裂	197
	この章のねらい	197
1	狂い始めた保守派のシナリオ	199
	(1) 冷戦の終結	
	(2) 広がる経済格差と政治不信	
	(3) 人種問題の泥沼化	
2	非 WASP 多数派社会の接近と多元化のベクトルの再活性化	203
	(1) 人口構成の変化と多文化主義の台頭	
	(2) PC 運動	
3	差別と対立の構造の複雑化と先鋭化	205
	(1) 言語戦争	
	(2) 非合法移民への風当たりとアフアーマティヴ・アクションの危機	
4	アメリカの世紀の終わりに	209

第15章	テロとの戦いと格差社会——唯一の超大国の誤算と変革への希求	211
	この章のねらい	211
1	終わりになき戦いの始まり	213
	(1) ポスト冷戦時代の地域紛争とネオコンの登場	
	(2) 同時多発テロ事件の背景と衝撃	
	(3) 監視社会の到来とイラク戦争への疑問	
2	不信と分断の負の連鎖	218
	(1) サブプライムローン問題とリーマン・ショック	
	(2) 格差社会の自衛社会化と公的領域弱体化のリスク	
	(3) SNS時代の到来とポピュリズムへの傾斜	
3	変革への希求の行方	223
	(1) 初の黒人大統領の誕生と変革への挑戦	
	(2) 変革の停滞とその要因	
	(3) 体制への失望とトランプの大統領当選	
4	過信の果て	227
第16章	未来のアメリカへの視角	229
	この章のねらい	229
1	歴史の中の現代アメリカ	230
	(1) 新たなるアイデンティティへの転換期	
	(2) 実験国家の正念場	
2	今後のアメリカを占う鍵	233
	(1) 神話との決別と空間軸上でのアメリカの自己相対化	
	(2) 過去の克服と時間軸上でのアメリカの自己相対化	
3	アメリカの未来と世界	239
	人名索引	241
	事項索引	243

# 第 1 章

---

## 序論

### ——現代アメリカの見取り図

---

#### この章のねらい

アメリカは、国としての歴史は短いとはいえ、様々な顔を持つ複雑な超大国である。そのアメリカを、特定の分野に決して偏ることなく総合的に理解するには、どのような方法が有効だろうか。ここでは、アメリカという国の特質を把握するための基本となる観点を整理するとともに、それらに基づいて本書がどのように構成され、いかなる射程を想定しているのかを説明する。

アメリカという国の特質は、経済や政治といった個別分野の勉強を重ねるだけではなかなかみえてこない。また、現代アメリカの姿だけをいくら眺めてみても、なぜアメリカがそのような姿をしているのか理解に苦しむことも多いことだろう。アメリカについて知りたければ、むしろ、まず、アメリカという対象をより鮮明にとらえるための座標軸を持つことが重要である。そして、そうした視座の下に、様々な時代、様々な領域の現象を有機的に結びつけていくことが、この国をバランスよく理解する早道なのである。

——87年前、われわれの祖父たちはこの大陸に新しい国家を樹立しました。その国家は自由の精神から生まれ、すべての人間は生まれながらにして平等であるという信条に捧げられたのです。

いま、われわれは大規模な内戦のさなかにあって、この国家——あるいは自由な精神から生まれて平等という信条に捧げられたあらゆる国家——が永続できるか否かの試練を受けています。(中略)

——われわれこそ、残された大きな課題に献身すべきです——われわれは、名誉ある戦死者が最後まで奉仕した偉大なる大義のために彼らの衣鉢を継ぎ、彼ら以上に奉仕すべきであり、彼らの死を無駄にしないことを固く決意すべきであり、神のもとでこの国に自由を復活させるべきなのです。そして、人民の、人民による、人民のための政治をこの世から消滅させてはならないのです。

エイブラハム・リンカン「ゲティスバーグの演説」(1863年11月19日)

『リンカン民主主義論集』角川選書(翻訳:高橋早苗)より

---

## 1 アメリカという国への素朴な疑問

---

アメリカという国は、日本人にとって恐らく最も身近に感じられる外国の一つだろう。例えば、プロ・スポーツや映画、音楽に関心のある人の中には、アメリカの試合をテレビ観戦し、アメリカ映画に足を運び、アメリカのミュージシャンたちのCDを買い求めるといった人も多いことだろう。また、政治や経済に興味のある人ならば、冷戦終結後もいわば唯一の超大国であり続けるアメリカの動きに注目せずにはいられないはずである。

確かに現在のアメリカは、このように他の国に対して強い影響力を持つ存在である。しかし、文化の発信基地として、あるいは世界の警察官や世界経済の牽引車としての役割をアメリカが本格的に果たすようになったのは、実は20世紀半ば以降であり、比較的最近のことにすぎない。つまり、アメリカは今の我々がすぐに思い浮かべるような姿を最初からしていたわけではなく、もしかしたら100年後のアメリカも今とはかなり違った姿をしているかもしれないのである。

一方、アメリカは、世界をリードするような存在でありながら、多くの問題も同時に抱えている。犯罪の多さや貧富の差は日本の比ではないし、自由と平等を掲げながらも未だにはびこる人種差別、離婚率の増加による家族の崩壊や子どもの虐待、麻薬や十代の妊娠など問題は山積している。アメリカ社会の表と裏の落差の激しさには、しばしば読者の方々も驚くことがあるはずである。

このようにアメリカという国は、日本人にとって身近であるとはいえ、実は不可解なとらえがたさをも同時に秘めている。建国からわずか200年あまりしか経ていないのに、なぜこれほどの国力を築くことができたのか、また、様々な社会問題があればほど深刻なものにもかかわらず、なぜアメリカは超大国であり続けることができるのか、アメリカという国を眺めているとこうした素朴な疑問がわいてくるに違いない。

こうした素朴な疑問を解くには、どうしたらよいのだろうか。アメリカは国家としての歴史そのものは短い、その変化の度合いの大きさやこの国の表と裏の

落差の程度を考えると、経済や政治や文学といった、個別分野の断片的な知識のみに頼ってこの複雑な超大国を理解しようとしても自ずと限界があろう。そもそも国力というものは、政治力や経済指標だけで表せるものではなく、個別の現象の背後に潜むこの国の推進力へと目を向ける必要がある。また、読者の方々の中には、現代アメリカで進行中の問題に関心を持っている人も多いと思うが、現代という時代が過去の経緯の積み重ねとして存在している以上、現代アメリカだけをみてもそれらの問題の十分な理解に至ることはできないだろう。むしろ、アメリカという国がそもそもどのような特徴やメカニズムを持っているのかという観点に立って、アメリカの歴史、社会、文化の動向を考えていくという発想こそ、アメリカに対する我々の素朴な疑問を解くヒントを与えてくれるのである。

---

## 2 実験国家としてのアメリカ

---

アメリカという国の特質を大づかみに把握しようとする時、まず注目すべきなのは、国そのものは建国以来大きな変化を遂げてきているとはいえ、この国の歴史がある一貫した特徴を保持してきているという点である。それは、この国が、いわば未完成の実験国家として歩み続けてきているという点である。

そもそもアメリカは、混乱の中から出発した国である。1776年に独立革命の最中に出された通称「独立宣言」と呼ばれる文書においても、独立して何という名前の国になるのか明記されていなかったし、独立戦争を戦っていた北アメリカ大陸の13のイギリス植民地がまとまって一つの国になるのか、それとも13が個々に独立国家となるのかについてもあやふやなまま独立戦争は始まっていたのである。つまり、アメリカは、国としての基盤が何もないところから人為的に国家を作り上げるといふ、途方もない作業に着手するところから始めなくてはならなかったといえる。

その上、当初から独立後の国家形態が不明確だったことに加え、13の植民地の人々の間には、自分たちは同じアメリカ人だという意識も最初はあまりなかった。しかも、この土地には、一つの同じ国民と呼ぶには背景があまりに異なる人々が

住んでいた。西欧諸国からやってきた白人たちも移住の目的や文化的背景に違いがあったし、アフリカから奴隷として連れてこられた黒人たちは、決して自分の意志でアメリカにやってきたわけではなかった。そして、この広大な大陸には、独自の伝統や生活様式を数世紀に渡って守り続けていた先住インディアンたちが暮らしていた。つまり、アメリカは、言葉も文化も立場も違う多種多様な人々の間に「アメリカ人」という共通の国民としてのアイデンティティをどう作り上げていくかという、集団統合の根幹に関わる問題とも当初から格闘せざるをえなかったのである。

アメリカという国家も、アメリカ人という概念も確立していない、いわば国家も国民も未完成の状態から誕生した国、それこそアメリカという国なのである。言い換えれば、アメリカは、人為的な国家建設と国民統合という、いつ完了するかもわからないような壮大な実験を宿命づけられて出発した実験国家なのである。しかし、未完成であるということは、決してマイナスばかりを意味するとは限らない。未完成であるという状態は、より完全な状態を目指した試行錯誤をうながすことにもなる。実際、その後のアメリカの歩みは、より完全なる国家とより完全なる国民統合に向けての試行錯誤の積み重ねとみることができるのであり、それは今日でも続いているのである。こうした試行錯誤は、ある時には武力という形を取ったり、別の時には法の力に頼ることもあった。また、こうした試行錯誤の過程で犠牲となる人々が出ることもしばしばであった。しかし、この国がしてきたこと、していること、これからするであろうこと、これらはみな、混乱の中から第一歩を踏み出したアメリカという国が、元来未完成であるが故にあえて様々な実験を試みるのを決して苦にしないことと密接に関係しているのである。人為的に国家を作り上げ、背景の異なる人々から一つの国民という集団を作り上げるという遠大な目標を追いかけながら、様々な実験を繰り返してきている国、それがアメリカなのである。

---

### 3 アメリカのエネルギー源としての相反する二つのベクトル

---

とはいえ、試行錯誤を繰り返すのは、相当の労力が必要なはずである。それに、今までのやり方を排して新しいものに切り換えるという実験には、人は二の足を踏むことも多いことだろう。それなのに、なぜアメリカは、良さそうなことは何でも新しく始めてみよう、だめならそこでまた考え直せば良いといった試行錯誤を積極的に許容するような、フットワークの軽さを維持することが可能だったのだろうか。これには、もちろん、自分たちの未完成さに対する意識が逆に積極的な姿勢を生み出したという部分もあろう。しかし、それに勝るとも劣らないほどこの国の重要なエネルギー源となってきたのは、この国を統合しようとするベクトルと多元化しようとするベクトルという、いわば相反する二つの方向性を持つ力なのであり、これら二つの力が社会内部に作り出す緊張状態がこの国に絶えず推進力をもたらす役割を果たしてきたとみることができるのである。

人為的な国家建設と国民統合を宿命づけられて出発したアメリカにおいては、社会や集団を何とか統合しようとする力が当然生まれてくる。こうした統合化のベクトルは、国内に共通の価値観を作り上げようとする方向性を持つ。しかし、先に述べたように、アメリカという国を構成している人々の間には、文化や立場にかなりの多様性が存在する。そのため、特定の価値観を社会全体に押しつけようとする統合化のベクトルが強くなれば、それだけ、それに抵抗する、いわば多元化のベクトルも活性化されることになる。つまり、アメリカという国は、人為的な統合を宿命づけられているものの、国を構成する人々の多様性ゆえに、特定の価値観を強制したり共有しようとするほど、それによって排除された人々の側からの抵抗が強まるような仕組みになっているのである。

こうした傾向は、社会を効率よく統合するという点から見れば不利に見えるかもしれない。しかし、二つの相反するベクトルが緊張状態を作り出すという構図は、アメリカ社会が持つべき伝統や価値観とは本当は何なのだろうかという問いへとアメリカ国民をその都度立ち返らせ、より多くの人に受け入れられるものを

試作してみようという動きに弾みをつけることにもなる。つまり、アメリカという国は、特定の価値観が暴走することに歯止めをかけ、軌道修正に道を開く反発力が作動するようなメカニズムを内蔵しているのであり、そのことがこの国の重要な推進力を形作っているのである。統合化と多元化という二つのベクトルのぶつかりあいを克服しなければならないということは、確かに面倒なことである。しかし、そうした状況があればこそ、逆に何とかしなければならないという、前向きの実験精神が絶えず刺激されることにもなるわけである。

アメリカという国が実験国家であり続けられる理由、それは、統合化と多元化のベクトルが絶えず緊張状態を作り出し、問題解決の必要性を社会に投げかけるという、この国に内蔵されたメカニズムに負うところが少なくない。国としての歴史の短さや、建国の経緯が物語る未完成さ、多様な集団の存在などは、一見するとこの国の弱点のように思えるかもしれない。しかし、アメリカは、未完成さを旺盛な実験精神へ、そして、複雑な民族構成をより妥当性の高い共通の価値観を模索する契機へと転換するメカニズムを、その短い歴史の間に獲得してきたのである。その意味では、アメリカという国は、弱点を強みに変える仕組みを育んできたのであり、その目標の遠大さに比例するダイナミズムとエネルギーを秘めた国といえるのである。

---

## 4 総合的なアメリカ理解に向けて

---

外国のことを理解するということは、実に奥が深い話である。アメリカという国の特定の時代や分野についてはよく知っていたとしても、それが果たしてアメリカという国をどれだけ理解したことになるのかという保証はない。過去のある特定の時代のアメリカのことはよく知っているが、現代のことはわからないとか、あるいはその逆という状態は、アメリカ理解としては不十分であろう。また、例えば、アメリカの政治についてはよく知っているが、文学のことは何も知らないといった具合では、やはり外国理解としては少々いびつではないだろうか。

こうしたことは立場を逆にして考えてみれば、さらに問題の所在が鮮明になる。

外国の人が日本という国を理解しようとする時、例えば第二次世界大戦中の日本の軍国主義の軌跡を学んで、日本人は好戦的だという日本観を持ったとする。また、経済という分野だけに偏った勉強をして、日本人はエコノミック・アニマルだという見解にたどり着いた外国の人がいたとする。こうした日本理解は、果たして日本人として受け入れられるものだろうか。特定の時代の現象や特定の分野のみに依拠した外国理解は、実はその国のほんの一部を言い当てているにすぎないことが少なくない。それを勝手に拡大解釈してしまうことは、かえって外国に対する誤解を増幅してしまう危険をはらんでいるのである。

このように考えてみると、外国理解のポイントは、特定の時代の出来事や特定の分野に偏らずに、バランスよくその国の動向を把握することにあるといえる。つまり、時間軸と空間軸の両方の座標軸からその国の文化・社会・歴史を総合的にとらえることが必要なのであり、そうした座標軸を欠いた外国研究は外国理解に直結するとは限らないのである。こうしたバランスの取れた外国理解に至るのは、決して容易なことではない。アメリカのような複雑で巨大な超大国ともなれば、なおさらのことである。しかし、実験国家としてのアメリカの発展途上性という観点に立った時間軸を設定し、そうした歩みを続けているアメリカの地での一つの時代にも繰り広げられてきた統合化と多元化のベクトルのせめぎあいという観点に立つ空間軸をもう一方に設定して、様々な時代、様々な分野の出来事を有機的に結びつけていけば、新たな伝統に向けた試行錯誤を繰り返しているこの巨大な超大国を、総合的にバランスよく理解することに道が開けてくるのではないだろうか。

本書の目的は、こうした問題意識に立脚して、特定の時代や特定の分野のアメリカを「研究する」というよりは、むしろ、まず、アメリカという国を総合的に「理解する」ための土台を整備することで、アメリカを「理解すること」と「研究すること」とのつなぎ役を提供することにある。それゆえ、本書では、特定の時代だけに極端に偏らないという観点から、植民地時代から21世紀まで、ほぼ時代順に各章を配列してある。従って、これを通読すれば、アメリカの歴史の概略も把握できるようになっている。と同時に、各章では、特定の時代のある分野の現